

和光会会報No. 51

－菱電サービス（菱サ）～三菱電機ビルテクノサービス（MELTEC）本社OB会－

◆ 無名異聞歩の風

……… (2017-09) —山本拓弘さんから投稿頂きました—

暑い！ 全く以て暑い！ それにしても暑い！ と、言ってもしょうがない愚痴を、毎日連発しながら在宅の今夏を過ごしています。いつもだと今頃は道東の別海町や中標津町、或いは道北のクッチャロ湖や稚内辺りに滞在して、朝夕の寒さを満喫しているはずなのですが、今年は地元の逃れられない夏に捕まったまま、じっと酷暑に耐えています。

このような時は、少しでも寒い話が必要な気がします。そこで、今回は先の佐渡ヶ島への旅で体験した肝も冷えるほどの冷たい風の話をしたと思います。

私にとっては、2回目の佐渡への旅でしたが、今回初めて金山跡を訪ねました。初めて佐渡に行く人なら、佐渡の金山跡を訪ねない人は居ないに違いありません。しかし、私の場合は最初はとてもそこへ行く気にはなれず、相川エリアを素通りして他に回ったのでした。佐渡といえば黄金の国日本を代表する金山のあった所ですから、ここを外すというのは、かなり異常な行動と言われても仕方ないことかと思えます。それには二つほど深刻な理由があったからなのです。その一つは、佐渡を訪れる数年前に、世界遺産となっている島根県大田（おおだ）市にある石見銀山跡を訪ねたことがあり、その時の経験が頭に残っており、もう二度とあの岩に穿たれた地獄につながるとも思われるあの細い坑道を見るのは真っ平御免と心に決めたのでした。その恐怖というものは、もはや興味や好奇心の限界を超えた世界なのです。灯された細い火が消えれば、真っ暗闇の世界の中で、殆ど素っ裸に近い姿で、岩石を掘り続ける人たちを想う時、そこには到底働く喜びなどがある筈もなく、悲痛な地獄にうごめく労働だったに違いないと思ったのでした。鉱毒に冒されて30代の半ばまで生きられるのがやっとだったという説明もあり、それを知りながら敢えてそこで働かなければならなかった人たちの心情を思うと、世界の銀の生産のかなりの部分を賄ったという石見銀山であったとしても、それを誇りに思って仕事に勤しんだとは到底思われず、ここでの生産は多くの労働者の命の犠牲によってもたらされていたのではないかと思ったのでした。

それからもう一つは、暗い小さな空間の閉塞感は、生きていることのすべてを奪われる感じがして、あの恐怖は二度と味わいたくはないと思ったのでした。それは、自分の脳の海馬が毀損して、そこに恐怖が入り込んで定着してしまって、トラウマとなった様に思えるのです。だから、坑道や洞窟などに入るのは真っ平御免なのです。つまり、簡単にいえば私には強度の閉所恐怖症という奴がとりついているのです。

少し脱線しますが、そのことに初めて気づいたのは、30年ほど前に遭遇したある出来事でした。仕事（？）でヨーロッパを訪ねた時なのですが、パリのとある高層ホテルのエレベーターに乗っていた時、突然ガタン！というショックと同時にエレベーターが停止したのです。定員が25名ほどのエレベーターのカゴには、ほぼ満員近い人が乗っていたのですが、それまで意識していなかったこの小さな空間が、その時突然恐ろしい密室の空間に変貌したのでした。坐り込むこともできず、全員が立ったままの状態での復帰を待つだけの状況でした。皆外国人ばかりで、エレベーターの性能も荒っぽくて、何だか嫌な予感がしていたのですが、いざ閉じ込められて見ると、5分もしないうちに脂汗が滲み出て来て、あれれ、俺はこんな筈ではなかったぞと思う間もなく、呼吸が切迫して来て苦しくなり出し、こりゃあ復帰するまで我慢できるのかと、突然の不安に襲われたのでした。幸い10分ほどで元に戻ったのですが、乗り合わせた人たちは、この程度の缶詰事故には慣れているようで、皆何でもない顔をしているのを不思議に思いました。生きた心地もなく冷や汗を流していたのは自分一人だけなのでした。日本であれば、たとえ10分の缶詰事故でも場合によってはニュースになり兼ねないし、保守を担当する会社としては問題の要因を突き止め、徹底的な再発防止を図ることになるのですが、パリのこの乗り物はそのような配慮は皆無の感じがしました。（皮肉なことに私の元勤務先はエレベーターの保守会社だったので）

この体験をするまでは、洞窟や鍾乳洞なども冒険の対象として何の疑問も感じなかったのですが、一度閉

所の恐怖を知ってしまうと、もう二度と日の当らない、閉ざされた世界に入るのは真っ平御免となってしまったのです。石見銀山を訪ねた時にも、坑道の中に入るのは止めようと思っていたのですが、世界遺産となっている場所でもあり、一度だけは中を覗いておかなければならないのではないかと、自分に強く言い聞かせて、恐怖心を抑えながら中に入ったのです。それ以降はもう二度とこの種の遺跡などには深入りしないことを決めています。

(閑話休題)

さて、「間歩」と書いてどう読むのでしょうか。「かんぼ」などとは読まないでください。正解は「まぶ」と読みます。「まぶ」といえば間夫などということばを思い起こすかもしれませんが、全く関係はありません。間歩というのは、鉱山用語で、明治時代以前は鉱石採掘の坑道をそう呼んでいたということです。佐渡の金山跡では、間歩と呼ばず「坑」ということばを使っているようですが、石見銀山では「間歩」が使われています。恐らく佐渡では明治以降相当に力を入れて鉱山の近代化が図られたため、「坑」と呼ぶことにしたのだと思いますが、自分的には遺産という見方からは、「間歩」と呼ぶ方が昔の時代を反映しているように感じます。

佐渡の焼き物(＝陶器)に無名異焼(むみょういやき)というのがあります。赤茶色の金属音のする硬い焼き物ですが、独特の雰囲気があって、愛好される方も多いようです。この焼き物の原料となるのは鉄分を含んだ赤土ということですが、これは勿論金銀山の掘削の際に見つかったものであり、副産物の一つということになると思います。佐渡の鉱山跡を歩いていた時に「無名異坑」という表示があるのに気づきました。

宗大夫坑の少し上手の方の小さな谷を入った左上の方にその間歩の入口がありました。

赤錆びた鉄柵で入るのを禁止されたその間歩の入口は、何故か私にとっては宗大夫坑などよりもずっと往時に近い本物の間歩の姿を訴えているように思えました。「無名異」という呼び名が、どんな理由で付けられたのか判りませんが、この呼び方にはある種の不気味さと哀しさの様なものを感じてなりません。あの焼き物の原料も恐らくこの間歩から出る赤土によるものではなかったかと、そう思いました。



ところで、その間歩の前に立った時です。そこから猛烈な冷気が噴き

佐渡金山跡、無名異坑の入口。この間歩の前に立つと、他の坑とは異なる異常な冷気が噴き出しているのを感じた。

出ているのを感じたのです。これはその前に宗大夫坑の入り口でも感じていたのですが、無名異の間歩の冷気はその比ではなく、心の芯までもが凍りつくほどのものでした。一瞬、これは何だろうと思いました。その日はかなり暑くて、日陰を求めたくなるほどでしたから、その冷気は好都合の筈なのですが、そのような気分を凍えさせるほどのものだったのです。

思うに、この間歩の中で、何かがあったのだと思います。その冷気の中には、人間の悪しき感情が全て籠められた怨念の様なものを感じました。冷気というよりも霊気といったものなのかもしれません。細く狭い空間の中に、何百年もの間閉じ込められたままの生き物の噴出す強烈な負のエネルギーの様なものなのか、その間歩の前に行くとぞっとするものを感じるのです。

無名異の間歩が、佐渡金銀山の中でどのような位置にあったのか分かりませんが、間歩の中で働く人間

の中には、世の見せしめとして送り込まれた無宿人と呼ばれる人別（＝戸籍）から外された犯罪者や浮浪者も多くあり、それらの人たちの中には冤罪のケースもあったことでしょうか、恨みや無念の思いを抱きながら生命を削らされて尽き果てた人もいたに違いありません。そのような人たちの負のエネルギーの凄まじさは、常人の計り知れないものだと思うのです。佐渡のこの間歩の中には、いまだ収まりきれないそれらの人たちの憤怒と虚しさで恨みの念が坑の遠近（おちこち）の窪みにこびりついて残り、そこから風を送っているのではないかと。そう思ったのです。

いま、そのなぜかを詮索するつもりはありませんが、あの冷氣はどんなに暑い夏の日でも、一瞬にして心を凍らせるほどのものだったかと、思い出すばかりです。歴史の中に忘れられたまま怨念の妖怪と化した人たちのことを思うと、暑いなどと言う愚痴を戒めなければならないと、そう思ったのです。

（2015年8月記）

◆ 会員の趣味のコーナー

今回から第15回和光会総会の展示作品を3回に分けてご紹介いたします。

今回もこれらを始めた時期（年数）・動機、作品を制作しての喜び（感動）、苦労したこと、「他に取り組んでいる趣味」などを含めて紹介いたします。

なお、出展出来なかった方の作品・趣味についても出来るだけ順次ご紹介をしていく予定です。

◆ 陶芸（5点）

……（2017-06）—金山 幸雄さんから投稿頂きました—



① 黒泥「龍紋様香炉」

黒泥「龍紋様香炉」は2014年度のOB総会にも類似の作品を出品させていただきましたが、龍の表情が気に入らなかったのと香炉としての通気性があまり良くなかったため、それを改善するために再挑戦してみました。釉薬は使わずに焼き締めています。



② 半磁「龍紋様一輪挿し」

半磁「龍紋様一輪挿し」は安定性を持たせるために若干底辺を大きくする形にして、龍の文様を際立たせるために円形で囲ってみました。釉薬はチタンを薄く吹きかける感じで使いました。



③ 黒泥「樹木紋様急須」

黒泥「樹木紋様急須」は樹木にカブトムシが止まっている様を表現してみました。樹皮と木肌を感じを出すのに苦労しますが、それも楽しみの一つです。

釉薬は内部はなまこ釉を掛けていますが、外側は釉薬を使わずに焼き締め感を出すようにしました。



④ 備前「酒器セット」

「酒器セット」は今回の出品作品の中で、唯一登り窯で焼成した作品です。登り窯は電気窯やガス窯と違い、焼成に大変手間がかかります。

この作品はもう 10 年以上前に金沢八景にあった登り窯を使って焼成したものです(現在その登り窯は撤去されてしまいました)。

4 昼夜ぶっ通しで交代交替で薪を炊き続け、更に一週間窯を冷ましてから作品を取り出します。どんな作品・焼き色に仕上がっているかが楽しみで、窯の蓋を開ける時が一番わくわく・ドキドキしたものです。

この作品は備前特有の棧切りと言われる火色は少ないのですが、ゴマ(黄色味)が若干出ています。形も単に瓢箪型ではなく、下部を箱型にしてみるなどの工夫を凝らしてみました。

◆ 木彫刻 (2点)

…… (2017-06) —小藤 俊雄さんから投稿頂きました—

「薬師三尊像」(彫刻)

左から月光菩薩、薬師如来、日光菩薩「弥勒菩薩半跏像(広隆寺)」(桧)



今回のモデルは福島県会津若松駅からバスで30分ほどの湯川村にある勝常寺所蔵の仏像です。

平安前期の作と言われ東北地方で国宝指定仏像の第1号です。同時期の京都や比較的当時の都会の寺の仏像に無い素朴な雰囲気が気にいっています。

◆ 写真
「テルテル坊主」(写真半切)

…… (2017-06) —和田 昭喜さんから投稿頂きました—



隣町の龍ヶ崎市文化祭にて蘭の展示会を鑑賞の際に花の形が明日の天気を願う、子供の頃のテルテル坊主にソックリなので思わずシャッターを切りました。

竹細工作品は、今年秀作が出来なかったので出品は断念しました。

◆ 水彩画(アクリル)
「ヨーロッパの名城 ノイシュウバアン シュタイン城」

…… (2017-06) —樋口 義三さんから投稿頂きました—



私はこのお城の実物は見たことがありませんが、たまたま、新聞に写真(A4サイズ)で大きく記載されているのを見て、チャレンジしようと思いました、特に白色(白亜)の部分は色々考えながら描きました。

◆ 事務局より

- 和光会会報No.34より「くるま旅くらし心得帖」の山本拓弘氏よりくるま旅について投稿いただいておりますが、今回は2015年8月「佐渡の旅」からを投稿いただきました。
なお、山本拓弘氏の「くるま旅くらし」の最近の様子は下記ブログに載っておりますので是非ご覧ください。

<http://blog.goo.ne.jp/vacotsu8855>
「山本馬骨」で検索しても可能です。

- ・ 会員趣味のコーナーでは第15回和光会総会の展示作品の中から、常連となりました小藤俊雄さん仏像木彫刻、和田昭喜さんの写真（残念ながら今回竹細工はありません）、一昨年・昨年に引き続き出展された金山幸雄さんの陶芸作品、それに加え、今回2回目の樋口義三さんの水彩画の4人の方の作品をご紹介します。

- ・ 和光会の連絡・問い合わせ窓口について

会社（人事部）の全面的な支援により、OB会事務作業（会員との連絡・通知、1194・カレンダーの送付等）を人事部の委託によりMTBにお手伝いいただいております、MTBの担当は総務・人事支援部（部長：志摩 正樹）で変わりありませんが、会報No.42でご連絡しましたように第13期より連絡・問い合わせ窓口は下記のとおり変更になっております。

担当：木村 律子BD、佐々木 敏行、野原 菜穂

電話：03-3803-8865（代表）

FAX：03-3803-8875

E-mail：meltec-OB-wakokai@mtb.ssg.meltec.co.jp

住所変更等通常の連絡・問い合わせはMTBの上記和光会担当か、和光会事務局（寺門）で済むと思いますが、会社の人事部の窓口は年金・基金を担当している方で次の通りです。

担当：大峰 勝則 SK

電話：03-5810-5392（ダイヤルイン）

FAX：03-5810-5501

E-mail：oheki.katsunori@meltec.co.jp

- ・ 2017年度会費納入対象の方は2005年、2008年、2011年、2014年および2015年に入会された方々です。会報No.50でご連絡したように、対象者宛「1194」「和光会会報」送付時振込用紙を同封いたしました。が、会費「4,000円（2年分）」の振り込みが未だの方は次の口座宛振り込み賜りたくよろしくお願い申し上げます。

なお、振込用紙を紛失された方は事務局あてご連絡くだされば再度送付いたします。

振込先：郵便局

口座番号：00100-7

口座記号：650896

加入者名：和光会

- ・ E-MAIL 会員各位へは INFORMATION をお送りしておりますが、最近不達が増えておりますので、**メールアドレスの変更時は速やかにご連絡**をお願いいたします。
- ・ 「和光会会報」・「1194」・カレンダーなどを会員宛送付しておりますが、宛所不在で戻ってくる場合がありますので、**転居・住所表示変更等の場合は速やかにご連絡**をお願いいたします。
- ・ パソコンのある方は、会報や総会写真を下記和光会ホームページに掲載しておりますのでご覧ください。（7月よりホームページのアドレスが変わりました）

http://www.geocities.jp/meltec_wakokai_hp/

皆様の日頃の活動やグループ活動などのお便り・投稿をよろしくお願いいたします。

2017-10-5 和光会事務局 寺門 三男
029-872-4122 mitsuotera@jcom.home.ne.jp